

平成26年9月10日(水)

老球の細道59号

バスケットボール誕生秘話 (III)

「ドリブルの誕生」

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

最近日本のプレーヤーのドリブルは驚異的に進歩した。私が現役の頃とは雲泥の差である。これもひとえにミニバスケットボールの普及とNBAのテレビ放映の影響であろうか。一昔前、日本のバスケットボールとアメリカのバスケットボールの違いはドリブルを見れば歴然としていた。アメリカはサーカスの魔術師、日本人はまるで女の子の鞠つきくらいのレベル差があった。しかし、現在は田臥選手でわかるように、その差はほとんどない。

バスケットボールの個人技の見所は、サッカーと同様に『ドリブル』だろう。このドリブルというスキル(技術)は、バスケットボールの歴史と共に誕生したのではなく、なんと、ルールの裏をかくプレーから偶然にひらめいて創案されたスキルであった。その誕生の秘密は、「13か条のルール」の第3条に鍵があった。

*第3条『ボールを保持したまま走るとは禁止。ボールをキャッチした地点でパスのみ。かなりのスピードで走っているときにボールをキャッチした場合、ストップしようと努力していると判定されたら、一、二歩は見逃されることもある』

このルールにしたがって、ボール保持者は強烈なディフェンスのプレッシャーからボールを奪われまいと、あたってくるディフェンスの反対側の方向に(片足はその地点から移動させないで)もう片方の足だけを目一杯遠くに踏み出して、両腕を伸ばし、踏み出した足の先端の方にボールの位置を変えた。だが、ディフェンスはなおも執拗にあたり続けてくる。そこで、ボール保持者はまた同じ方法で片足だけ踏みかえ、両腕を伸ばして、ボールをディフェンスから遠い位置へ、遠い位置へと変え続けた。どちらかの足を軸足にして(ちょうどコンパスの針のようにして)、もう片方の足を360度いかなる方向に思うように踏み変えることは相手からボールをキープするときの重要な技術になるとひらめいたのである。これが『ピボット』のルーツになった。このピボット(PIVOT)には「軸を中心とする回転」という意味がある。1893年には、「ボール保持者がその地点で片足を踏み変えることはボールを保持して進行したことになる」というルールが導入され、ピボットはスキルとして認められた(若松駅前の「ピボット」とは何ら関係がない)。

しかし、ピボットだけではディフェンスのあたりはかわしきれなかった。ボール保持者はピボットしている最中に、思わずディフェンスから遠い方にボールを軽く放り投げ、そのボールが床にワンバウンドしている間に1歩、2歩両足を動かして追いかけてボールを保持し直した。これなら、床から弾んだボールが空中にある間に移動するのだから、「ボールを保持したまま走った」ことにはならない。コーチやプレーヤーたちはまたひらめいた。「ボールがワンバウンドしている間に位置を変えたら、第3条に違反しない。しかもこの動作を連続させたら、そう簡単にはディフェンスにボールを奪われない」。やがて、このプレーを『ドリブル(dribble)』と呼ぶようになった。

閑話休題。dribbleは「drib」の反復形といわれる。dribには「to drip(ドリップ)」ぼたぼた落とす、ぼたぼたしたたせるという意味がある。

ドリブルはそもそもディフェンスからボールを守る手段としてデビューした。